

ニッポン ドクター和の 臨終凶巻



ひとごととは思えない！ かつての人気アイドル孤独死のニュースに、私の周囲にいる妙齢の女性たちは異口同音に不安な顔をしました。

正統派美少女アイドルとして、1990年代に活躍した川越美和さんが、9年前に孤独死をしていたと週刊誌が報道をしたのです。

享年35歳。

川越さんは、亡くなる数年前から、精神的バランスを壊し、酒浸りの生活を送っていたとも報道されています。知人の勧めにより、一度はアルコール依存症治療も行って

10 川越美和

長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で「人をつなぐ」総合診療を目的とする在宅医療「やめどき」を開設。著「痛くない死に方」「死に方」はベストセラー。関西国際大学客員教授。

いたそうですが、お酒をやめることができませんでした。重ねて、抗うつ薬も飲んでいただけのこと。

亡くなる1年前には、コンビニのポリ袋ほどの大きさの袋ほどの薬を手にメンタルクリニックから出てきた彼女が目撃されていたそうです。10種類以上も薬を飲んでいただけです。手を差し伸べようとした人は何人もいたようですが、酒



私のクリニックにも年に何度か警察から電話が入り、孤独死の現場に立ち会います。時には、ペットの犬や猫も一緒に死んでいることもあり、いまだ憤れることはあります。虐待事件でも同じことが言えますが、ドア一枚で隔たれ

と薬の依存から抜け出すことはできなかった結果、東京都内のアパートで変わり果てた姿で発見されました。死因はあきらかにされていませんが、状況から察すると、「緩やかな自殺」もしくは「セルフ・ネグレクト（自己放任）」と言った方がいいのかもしれない。

こうした報道を耳にすると、今の精神科医療の在り方に疑問を持たざるを得ません。多剤投与の先にセルフ・ネグレクト、自殺という悲劇が起きて、薬を処方した医師はなんら責任を負わないからです。外來に來なくなったら、それで終わり…。同じ医療者として腹立たしい。

た向こうで起きていることに、われわれはあまりにも無関心ではないでしょうか。

今、菅野久美子氏という若いノンフィクション作家が書いた『孤独死大国』という本が話題になっています。私も拝読しましたが、川越さんのような死は決して珍しいことではないのです。

本によれば、孤独死の8割がセルフ・ネグレクト状態であるというデータもあるそうです。食事を拒否したり、自身の健康状態に関心を持たなかったりして、いつしか寝たきりとなり、声を上げぬまま衰弱死する。

こうしたケースは、介護保険制度が適用される高齢者よりもむしろ若い人に多いとのこと。菅野氏の予測によれば、わが国の23〜29歳のうち、実に1000万人が孤独死予備軍であるといわれています。「孤独死大国」とはつまり、「絶望大国」とニアリーイコールであると私は思います。未婚率や貧困率だけを見ても何も解決できません。弱い者に冷たい政府のフラクタル（相似形）で、冷たい人間関係ができあがる。だからこそ、あなたの電話一本で、救える命があることを忘れないでほしいのです。

「多剤投与」「孤独」の悲劇